

親鸞の誕生

JR京都駅の約10kmの地にある日野は静かな里である。その日野の里に法界寺という真言宗の古刹がある。そして、その寺の境内「親鸞聖人御誕生地」と刻した石碑が建っている。親鸞は日野のこの地で生まれたと伝えられている。色々な説があるが、浄土真宗ではこの地を親鸞誕生の地と定めている。

生年は親鸞が多くの著書などに年号と年齢を記しているのので、逆算すると承安3年(1173)に生まれたことになる。誕生の月日は明確ではないが4月1日を当てている。これは浄土真宗本願寺派21世法主の明如が明治20年、伝説に基づいて旧暦4月1日を太陽暦に換算して、5月21日に降誕会を本願寺御影堂で行い、また真宗大谷派もこれにならい降誕会を旧暦のまま4月1日に決めたことによる。4月は釈尊と法然の、また1日は聖徳太子の誕生日によったものといわれている。

藤原氏は、藤原鎌足の子の不比等の後に南家、北家、式家、京家の四家に分かれた。最も栄えたのが北家で、その北家の内膳の子の真夏が、親鸞の生まれた日野家の祖である。この真夏から7世の孫に資業という人がおり、その資業が日野に法界寺を創立して日野家の寺院とし、また一族が寺院参詣の折りの休み所として、近くに山荘を営んだといわれている。

親鸞の曾孫で本願寺3世になった覚如が、親鸞滅後33年後に作成した親鸞の伝記の『本願寺親鸞聖人伝絵』(詞書(ことばがき)だけのものを『御伝鈔』という。以下『親鸞伝絵』という)によると、親鸞の父は有範といい、皇太后宮大進(こうたいこうぐうだいしん)と記されている。

皇太后宮大進とは、皇太后に仕える大掾(だいじょう)とあって、5位か6位の身分の低い役職である。有範は当時後白河の後に仕えていた。この後は皇嘉門院とあって、関白太政大臣九条兼実の姉に当たる人である。

また、『親鸞伝絵』に親鸞の母のことは触れていない。そればかりか正確な史料にも母のことについては記載がない。覚如の長男の存覚が書いたという『親鸞聖人正明伝』(以下『正明伝』という)によると、「母は源氏、八幡太郎義家の孫娘貴(吉)光女と申しき」と記されている。また、江戸時代の正徳5年(1715)真宗高田派の五天良空が47歳の時に著した『高田開山親鸞聖人正統伝』(以下『正統伝』という)は史的に疑わしいところもあると指摘された本であるが、編年体になっているので大変解りやすい。それには「聖人御母は源氏。清和天皇7代の孫、八幡太郎義家の嫡子、対馬守義親の息女なり。名を吉光女と申す」と『正明伝』を参考にしたのであろうか、そう記している。しかし、正確なことは不明である。また、親鸞の幼名は松丸とっていたというが、これも不明である。

母は親鸞が9歳の5月21日に逝去し、また父も安元2年(1176)5月卒去したので、弟ともに伯父範綱の養子に出されたと一説にいわれている。だが、その年の父の卒去は誤りで、父有範は、その年何かの理由で法界寺の南方およそ10kmの地にある三室戸寺に隠棲したといわれている。それを覚如の伝記である『最須敬重絵詞』の中で、親鸞は「幼稚にして父を喪したまいける」と誤記したため、そのように伝えられたらしい。

天明7年(1787)に書かれた『都名所図会拾遺』には、「有範卿墓、三室戸の内にあり、有範卿は親鸞聖人の父なり」と記されている。三室戸寺は西国三十三所第十番の霊場でもある。また、父の隠棲の理由を、皇太后宮の崩御、あるいは以仁王の反乱に参戦したからとの説がある。いずれにせよ、父有範はかなりの長命で、親鸞が34歳まで三室戸に隠棲していたといわれている。

親鸞が生まれた承安3年という年の前後は天変地変が多く発生し、政治的には藤原氏が無力化し、律令制度も崩壊して、南都北嶺の僧兵が跋扈して、世の中が乱れ始めた時でもある。また、平清盛が娘徳子を高倉天皇の中宮にたてるなど、平氏全盛の時である。盛りというものはそうそう長くは続かない。盛者必衰の

理で、この頃から平氏の前途に暗雲が漂い始めた時代でもあった。

日野家は儒家で、多くの学者を輩出しているが、伯父の範綱と宗業も儒学の人で、とくに能筆家であった宗業は文章博士になったほどの学者である。親鸞は幼い時にその伯父から薫陶指導を受け、将来あれほどの著作を残す基礎を叩き込まれたことは間違いない。(新妻久郎)